［COMMUNION］
WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.html
E-mail:comm.tko@nskk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678 Diocese Office

東京教区時報【ペンテコステ号】
コミュニオン

第１０号
（通巻１２４５号）
2013年5月19日
編集：広報委員会
委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園３－６－１８

《シリーズ・宣教協議会の提言から　その②》

ケリュグマ
ー み言葉に聴き、また伝える共同体 ー

司祭 マリア・グレイス　笹森　田鶴

２０１２年日本聖公会宣教協議会では、「いのち、尊厳限りないもの」―宣教する共同体のありようを求めて―というテーマの下、教会が教会であるための5つの要素を柱とした提言が策定されました。今号はその一つ、「み言葉に聴き、伝えること」〈ケリュグマ〉について取り上げます。

キリスト者の関心事は、常に教会共同体の形成に関わることです。キリスト者として生きることは、主イエスをキリストと告白する人びとの集まりである教会において生きることだからです。そして教会は、神の働かれる歴史と世界という時間と空間のただ中で存在し、その使命、また将来への方向性を模索しながら共同体を形成してきました。

宣教協議会のテーマも提言も教会形成に関心を集中させています。教会、東京教区、日本聖公会、そしてアングリカン・コミュニオンが、この時代と世界の中で、神と人びとに奉仕する信仰共同体として歩み、神の国を実現するビジョンと実践をどのように示していくことができるのか。この問いに誠実に応えて生きること自体が教会の力であり使命であると提言しています。その指針が「み言葉」です。み言葉は生きています。だからこそみ言葉は、時間を越えて今も尚、教会を励まし導くのです。

聖書に記されている事柄は、単なる過去の出来事をまとめたものでも伝記でも歴史でもありません。例えば福音書は、主イエスや弟子たちに関する記憶の断片や伝承、また書き留められたものが教会共同体、ことに礼拝の中で伝え続けられ、それらを素材にしてその後少なくとも30年を経て編纂されたものです。それは過去の人物の物語としてではなく、今も生きてこの世界と歴史のただ中に働かれ、人びとを救いと恵みに導き、癒し、力づけてくださる神と自分たちの物語として描かれたものです。編纂された時代の教会へと語られる主イエスとの出会いを描き、今生きている

わたしたちの救い主と告白しているのです。更に後代の人びとにも救いを与える未来の主イエス像もはっきりと示されています。このような過去と現在と未来を同時に見渡す信仰の時間軸を、福音書のみならず聖書全体は持っています。

21世紀に生きるわたしたちにとっても、み言葉は生きています。わたしたちは、現在にありながらも永遠の神の時の中で過去と未来を同時に経験し、この世界に働かれる神の偉大さに触れることができます。

また教会形成の指針としてのみ言葉を常に共同体の中で分かち合うことによって、教会は聖書の解釈や翻訳の完成度を歴史の中で発展させてきました。それは、思い込みや誤った聖書理解による差別や的外れな世界観を克服してきた歴史でもあります。共同体としてみ言葉を聴くことは、個人の経験や知恵を越えた多様な視点を通して真理へと向かう不断の努力の道です。そしてこのみ言葉に支えられ、教会は神の救いの働きをこの世界に示す器として整えられてきました。時間や空間を越えて、神がみ言葉を通して示されることを、喜びをもって多くの人びとに伝えることができますように。

エルサレム教区協働委員会
8年の歩み

委員　岩浅明子

２００４年に植田主教随行団が聖地を訪れた時、ベツレヘムはイスラエル軍の攻撃を受けた後で生誕教会は砲撃の傷生々しく街はゴーストタウンのようでした。検問所では、銃を構えたイスラエル兵の前を一人ずつ歩くという厳重さでした。パレスチナ人の家もオリーブ畑も破壊して建てられた分離壁によって、町や村は分断され、学校病院職場、自分の畑へ行く時ですら、事前に申請をして、通行許可証がないと検問所を通る事が出来ず、重病人は病院に間に合わずに命を落とすことも頻発しました。富裕層は海外に逃れ経済は疲弊し、信徒は激減しました。

これらの状況を知って、クリスチャンとして放って置けない思いから、同年、当委員会は立ち上げられました。東京教区の皆さんにパレスチナ人のこのような困難を、知って祈っていただこう、現地のクリスチャンの直接の声を聞こうと、８年間に５回パレスチナから様々な人をお招きしました。主教、司祭、信徒、イスラエル人の平和活動家、聴覚障害を持つ子どもの施設長、それぞれの立場で何をなすべきか、祈りつつ希望を失わず取り組む姿に接することができました。

それと交互に日本からも訪問し、「新しい聖地旅行」と名付け、名所旧跡を観光する旅ではなく、現地の人々と会い、現地の生の姿を見る旅を始めました。交流の度毎に私たちが学んだことが報告書にまとめられています。現地の問題は大きく、委員会の本来の目的「知って祈ってください」を伝える働きは、未だ十分とは言えません。

東京教区が取り組みを始める前からパレスチナの子どもたちや難民の支援に取り組んでいるＮＰＯやＮＧＯのグループとも協力し、また教区の皆様に別の角度からもパレスチナ問題を見ていただけるよう講演。報告会などを重ねてきました。

ベツレヘムには観光客が戻り賑やかに平和になったように見えますが、パレスチナ人の土地を奪った入植地は増え、西岸地区の村や町を廻る壁は、国際司法裁判所の判決を無視して、今なお増え続けています。イスラエルの支配は拡大してパレスチナ人の状況はますます悪くなってきています。

試行錯誤しながらの８年間の交流ではありますが、東京教区は、エルサレム教区の友となり、祈り、小さくても一緒に働いて神の業に与ろうとしてきました。「こうした連帯感が私たちをどれほど励ますことになっているかを、どうか忘れないで欲しい」と、現地の人達は言います。絶望的な状況なればこそ、今、見捨てることはできません。

キリストは、私たちが絶望しそうなとき私たちの傍らに立って共にいてくださいます。私たちも主に倣って友のそばに立ちたいと思います。

＊＊＊＊＊＊＊

私とパレスチナ

委員　梶山順子

日頃、自分ではわかっているつもりのことが、間違っていたり誤解だったりで、愕然としたり、赤面することがままあります。　私にとって、その一つが聖地にまつわることでした。

初めて聖地旅行に行ったのは１９９９年のこと。その時までイスラエルとは２０００年の間、世界に散らされ、ホロコーストを生き延びたユダヤ人たちによって、約束の地に再建された預言の成就の国だと思っていました。

でも、実際に旅をしながら見えてきたのは、パレスチナのことでした。その後、エルサレム教区協働委員会の中であちらと交流するうちに、自分の認識がいかに間違いだったり、誤解だったりしたかを知りました。

数年前、パレスチナ難民キャンプの子どもたちの絵の展覧会に行きました。その中に「パレスチナの英雄」という題で描かれた一連の絵の中に、ペリシテ人に捕まったサムソンが鎖に繋がれ、やがて力を取り戻して、神殿を破壊し、多くのペリシテ人を殺した連作の絵がありました。サムソンがパレスチナの英雄として描かれている！知っているつもりになっていた私の頭の中では、パレスチナ人はペリシテ人の子孫のように思っていましたが、考えてみればパレスチナ人もあの地に元々いた人々で、海を渡ってきたペリシテ人ではないのです。つまり、ユダヤ人もパレスチナ人も元は同じ人たちで、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教は同じヤーウェの神を神としているのです。

最初の頃、イギリスやフランスはホロコーストのツケをパレスチナ人に押し付けて、自分たちの見えないところにユダヤ人を送ったと思っていました。でも、あそこは「神がユダヤ人に与えた土地」と信じ込み、国連などでイスラエル支持をして、アメリカやイスラエルに賛成しているクリスチャンも同罪だと思うようになりました。クリスチャンがあの地は神からユダヤ人に与えられた約束の地という思い込みから解放されたら、今のパレスチナ問題は少しでも良い方に変わっていくのではないかと思っています。

写真で見る活動と交流－１

モーセ終焉の地といわれるヨルダンのネボ山

パレスチナ料理

開会礼拝ーシュネラ・チャペルにて

ベツレヘムにあるアイダ難民キャンプの入り口

エルサレムの近くの高さ８ｍの分離壁

聖ジョージ主教座聖堂にて

写真で見る活動と交流－２

アティーク司祭とハーパー氏の講演会

エルサレム教区主教スヘイル・ダワーニ師夫妻

Br. アンドリューの歓迎会

アティーク司祭とハーパー氏の歓迎会

ヨルダンにある聖地ろうあ子どもの里で

司祭と語ろう（その7）

司祭　山口　千壽

今回は、現在聖パウロ教会と東京聖マリア教会（管理）で司牧されている山口千壽司祭に、聖パウロ教会信徒の奥山尚さん、木崎真子さんからお話を伺っていただきました。

―まずは牧師になられた経緯からお聞きします。

山口　やはり家庭環境が大きいですね。私の祖父（信太郎）が司祭で、千住の教会を開拓伝道で始めて、その後、まだ戦前だったと思いますが、葛飾に移りました。

私はそこで生まれたのですが、父（千尋）は医師でしたが、戦後、司祭になりました。親は医者にしたかったようです。ただ高校の時、理科系が苦手と分かり、その道は断念して立教のキリスト教学科に入学しました。まあ、大学では勉強もせずに遊んでいましたね（笑）。

―その頃は学生運動の闘士だったと伺っていますが。

山口　時代ですね。周りで起る出来事に関わって行くことがクリスチャンの責任であると信じて行動していました。どうも極端に走る性格なのでしょう。

―だからでしょうか。教区会では結構厳しい質問もなさいますね。

山口　どうも黙っていられないんです。

―先生の、教会での笑顔と教区会で討議している時の顔付きは全然違います。パウロ教会の信徒が見たらびっくりするのではないかと思うくらいです。

山口　教会は身近ですから、あまりおっかない顔もしてられませんけど、教区会はどう思われてもいいですからね（笑）。特に最近の教区会は面白くないです。

―確かに、ほとんどが報告で終わってしまいます。

山口　それも必要なんですが、創造的な、クリエイティヴな部分が無いような気がします。

―先生は教区会の時とは違い、教会では穏やかに、信徒の話や言い分を聞かれる方ですね。

山口　教会では、自分がリーダーシップをとって旗を振ることより、信徒が主体的に働こうとする力を見守って、それを進めていけるような環境をつくる方が大事だと思っていますから。

―先生には教会運営のリーダー的なことを期待している信徒も多いと思いますが。

山口　何に主眼を置くかです。私の場合は説教中心という考え方で、説教をどう聞いてもらうかを大事にしています。

―その説教ではどのような点を大切にしていらっしゃるのですか。

山口　基本的には聖書に基づいてするということですね。聖書の言葉を自分なりにどう受け止めたか、聖書が何を伝えようとしているのか、そこから得たもの、学んだものを咀嚼して、それが自分を生かしているという思いを分かち合いたいと思っています。

―私が教会に来た頃は2，30代の信徒が多かったような気がしますが、今その年代の人たちが増えないのはどうしてでしょう。

山口　どこの教会も同じだと思います。今の若い人も求める気持ちはあるのでしょうが、キリスト教のような既成の宗教が、その人たちに満足なものを与えられていないのかもしれません。

―学校や仕事の帰りに参加できる夜のプログラムとかを、教会だけでなく教区でも行ってほしいです

山口　いろいろなプログラムを考えることは大事ですが、特効薬みたいなものは無いと思います。教会としては着実に礼拝を守るということしかないのではないでしょうか。そして、その中で牧師が何を語るかだと思います。

―少し引いた目で見て、パウロ教会が大切にしていかなければならないことは何だと思われますか。

山口　普段、話はしていてもコミュニケーションをもっと取ることでしょうか。その上で軸を作らないと、何をするにしてもバラバラな印象になってしまうと思います。

昔はローチャーチの伝統があり、古い記録を読むと熱心に伝道したことなどが書かれています。

―宇田川町の頃は十字架も置かない教会だったそうですね。

山口　まさに伝道、聖書、信仰告白などを大事にするプロテスタント的な考え方をする教会で、信徒の中にはそういう伝統を誇りに思っている人もいらっしゃいます。

―最近はあまり「信徒の証」をしていませんが。

山口　やはり、信徒の方が信仰をどう得たかとか、その体験、神さまとの関わりなどを言葉化し教会で分かち合うのは大事なことだと思います。

―ご自分の長所とか短所はどのように思われていらっしゃいますか。

山口　短所は何かに乗っかりやすい所ですかね。人に煽動されやすい気がします。

―意外な感じもしますが。

山口　性格は若い時から変わらないですね。近くで火事とかがあったらすぐ見に行きます（笑）。

―それで乗せられて、今度フェスティバル委員長をひき受けられた（笑）。抱負は如何でしょう。

山口　今年は教区成立90周年で、百年に向けてキックオフの年になるわけですが、この10年は、多くの司祭の定年など今まで心配されてきことが現実になる10年でもあります。そんな中でいかに元気を出していけるかですね。10年後、私は定年でいませんけど（笑）。

―教役者不足で、百周年記念の時も乗せられて名誉委員長とかなさっている気がします（笑）。

［司祭のこの一冊］

『アブラハムの生涯』

森　有正著
日本基督教団出版局
一九八〇年

司祭　中村　邦介

本書は、著者が5回にわたって行った連続講演を基にして出版されたものです。森有正氏は既に独創的な研究者・思想家として知られていましたが、晩年になって一連の何冊かの著書を刊行しました。その中には『経験と思想』（岩波書店）という氏の代表的な著作もありますが、本書は氏のキリスト者としての生き方を極めて平易に説き明かしたものです。

この本に出会ったのは大学時代でしたが、キリスト教とは一体何かについて悶々とする日々が続いていました。一体信仰とは何かについて思い悩んでいた時に、私はこの本を通して一つの大きな手掛かりを与えられました。

氏は人間の一人一人のもつ独自の世界を「経験」と捉えています。そして人間の生涯を構成している本質的な契機であるこの経験という観点から、信仰の父と呼ばれてきたアブラハム物語を読み解いていくのです。特に私が関心を抱いたのは、経験を導いていく「内面的な促し」という契機です。氏の深い思索によって語られるアブラハムの生涯の一つ一つの出来事は、人間の経験の成熟のプロセスを物語る普遍的な意味を明らかにするのです。しかしそれはアブラハムを何か模範や教訓とすることではないのです。そうではなくアブラハムに起こったその出来事を通して、私たち自身が、自分の経験に即して、それを深化・成熟させていくことにあります。

本書は久しく絶版でしたが、日本基督教団出版局からオンデマンド版として出版されています。

本州付近で急激に発達した低気圧の影響で、未明から首都圏に台風並みの風が吹き荒れるとの予報が出た。本学ではキャンパス内に林立する立て看板はいったんすべて撤去され、風に飛ばされそうなものは残らず片付けられた。

工事中のキャンパスへの出入口では、伸縮式の簡易ゲートが風で動かないよう「かんぬき」が通され、その「かんぬき」は校舎の柱に結ばれたロープで厳重に固定された。ガッチリと固定され、おそらくはかなりの強風が吹いてもびくともしないであろう伸縮式の簡易ゲートを見るにつけ、ふとこんなことを考えた。「迫り来る風が聖霊で、あの門が自分なのかもしれない」と。

聖霊はよく風に例えられる。どこから吹いてきてどこに吹いていくのかわからない。もちろん目には見えず、しかし木々をはじめさまざまなものを通して確かにそれが力を及ぼしていることがわかる。

主は「別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる」（ヨハネによる福音書14：16ｂ）と約束してくださった。つまり今もこの世界に聖霊は働いている！

しかし私たちは目先の快適さ、世間の評価、私利私欲という「かんぬき」やロープで自分を縛り、その力を受け入れることを自ら断ってしまっているのではないだろうかと。

風に吹かれるまま、は言い過ぎにしても、聖霊の力を信じて遣わされる場所に吹かれていくことも大切なのではと考えた次第。預言者エレミヤへの主の言葉が思い出される。「わたしがあなたを、だれのところへ遣わそうとも、行ってわたしが命じることをすべて語れ。彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて必ず救い出す。」（エレミヤ書1：7ｂ-8）。

自然の猛威に対する職員の迅速な対応を見ながらの発想にしてはいささか失礼ながら、以上、新学期の一日に思いめぐらしたこと。聖霊の働きに身を委ねる自由さを祈り求める日々である。

《聖書を開いて》⑧

聖霊の力に身を委ねる

立教大学チャプレン　司祭　八木正言

イエス様に息・聖霊を吹き込まれて生きる

司祭 佐々木　道人

聖霊降臨日には、イエス様が復活して弟子たちに姿を現すヨハネ福音書20章が読まれます。この聖書にイエス様からその息を吹き込まれる弟子たちが登場します。よく関係が深い人のことを、「あいつは、誰々の息のかかった奴だから」と言います。それなら、私たちクリスチャンは「イエスの息がかかった連中」とでも呼ばれているのでしょうか。この聖書で、イエス様の「息の吹きかけ」は「派遣とその仕事の内容」が結びついて語られている、大切で、魅力的な箇所です。そして、そのイエス様による派遣は「他者への赦し」の使命・ミッションの仕事をうながされる出発なのです。

それでは「息を吹きかけられる側の」弟子たちは、どのような姿で、それを受けたのでしょうか。イエス様が、息を吹きかけに現れて下さった時、弟子たちは絶望の真っ暗闇に引き籠っておりました。イエス様に評価される何ものをも彼らは持っていませんでした。イエス様を見捨て、その結果死に至らせてしまったという、後悔と、罪悪感、さらに、死刑囚の弟子ということで自分たちも訴追され殺されるのではないかと言う恐怖感で全身を固まらせていたのです。

しかし復活したイエス様はこともあろうに、「あなた方に平安あれ」という祝福の言葉をかけてくださいました。息をつめて固くなっていた弟子たちの心身がふっとゆるんだ瞬間、イエス様は一歩近づかれて、息を吹き込まれました。それが聖霊体験です。イエス様の息が、風が、弟子たちの心身を吹き抜けていきました。これが赦しの体験です。このように身を以て赦された弟子たちに、今度は赦しのミッションの言葉がイエス様から直々に与えられます。

「聖霊を受けなさい。誰の罪でもあなた方が赦せば、その罪は赦される。誰の罪でも、あなた方が赦さなければ、赦されないまま残る」

私たちはよく「聖霊とは？」とか聖霊を対象化して考えがちですが、聖霊は「私たちが赦された」体験と切り離して語ることの出来ない、私たちの「体験的事実」なのです。ですから「私にしてもらったことを、今度はあなた方が自らの手で他の人々へしなさい」とイエス様は語りかけるのです。そのようなことが起きる時、私たちは五月の青空に泳ぐ、鯉の吹き流しのように、風・聖霊を体いっぱいに受けて、自由に泳ぐことを許されているのだと信じます。

芝公園の窓から④

4月16日から22日まで沖縄にて「東アジアにおける平和と和解に向けて」というテーマで「第2回世界聖公会平和協議会」が開かれ日本、韓国、フィリピン、米国、カナダ、英国、オーストラリア、アイルランドの聖公会から約80名が集まった。東京教区からは大畑主教を含めスタッフ、通訳など6名が参加した。私も通訳として参加した。

印象深かったのはある主教の話であった。「わたしたちは68年前互いに敵であった。」

68年前の4月は米軍が沖縄本島上陸を開始し約3～5ヶ月にわたる沖縄戦が始まった月である。沖縄に集まった参加者の国々は68年前、互いに敵として憎み合い、殺し合い、心の中に大きな傷を負わされた。しかし68年後の今、聖霊の導きによってこのように出会って、相手の痛み、傷、思いを分かち合い、神が望んでおられる平和を実現するための器になることを決心したのである。聖霊なる神が常にわたしたちと共におられ、わたしたちを平和の器として用いてくださることを信じる。　（宣教主事　司祭　卓　志雄）

東京教区成立90周年記念特祷

愛をもって全世界を支配しておられる神よ、あなたは、み子イエス・キリストをこの世界に遣わし、み心を示し、救いの望みを与えてくださいました。ことに東京教区を守り支え、多くの働き人を養い育て、教区成立90周年の喜びに導いてくださいましたことに感謝し、み名を賛美いたします。

わたしたちが一つになり、心を新たにし、あなたに仕え、この世界にみ国の正義と平和を実現していくことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。　　アーメン

今年東京教区は教区成立90周年を迎えます。教区成立記念日（5月17日）に近い主日である5月19日（聖霊降臨日）より、各教会・礼拝堂において代祷などで用いてください。

私たちの教会［6］

ようこそ小笠原聖ジョージ教会へ

世界自然遺産の島　小笠原聖ジョージ教会の

あゆみ

東京から南へ千キロ、今から180年前、鯨を追い求めて欧米人がこの島を発見。明治の20年前、世界のどの国の領土でも無かった時、英国皇帝ジョージⅣ世が島は英国領と宣言したことにより、英国聖公会の宣教師が来島する所となったのです。明治42年、英国及び日本聖公会の援助によって教会堂を新築、聖別式は在日のセシル主教及びチャモレー司祭の来島によって執行されました。英国聖公会の物心両面の心暖まる援助に感謝記念する思いで、英国の伝統的守護聖人である聖ジョージを教会名として神さまに献げられました。そして初代教会牧師にジョセフ・ゴンザレス司祭が任命されたのでした。時は流れて、太平洋戦争の激しくなった昭和18年にゴンザレス司祭は逝去された。

その後、代行者として東京聖アンデレ教会の野瀬秀敏司祭が、また18年末には岩井祐彦司祭が牧者として来島している。19年の6月には戦火によって、教会堂は焼失し、又全島民は内地に引き揚げたのです。

昭和20年8月15日の敗戦で、小笠原は米国の施政下に置かれ、21年に欧米系島民

120人が帰島、島での生活が許されました。37年に米海軍の許可により小笠原愛作司祭が入島、欧米系島民の牧会に当たりました。昭和42年米国海軍と島民の手で新聖堂が建設され、米国聖公会ハワイ教区のケネディ主教が来島されて聖ジョージ教会と命名し聖別式が執行されました。

米国より43年6月に小笠原が返還され、日本聖公会東京教区の一教会となって45年目の今日、私達島の教会は欧米系の方を中心に主日礼拝は10名前後と家族的雰囲気の中で感謝賛美の礼拝を献げています。

主イエス様の御復活と昇天そして聖霊降臨の喜びの時に当たり、島は世界自然遺産を有する大変大切な存在となりました。一方、私達は先祖が神様から頂いた尊い信仰の遺産を後世の人々に伝える大切な使命があると心しています。洗礼を受け、神の子とされ、聖霊の印を頂きましたことを深く心に止め、聖霊の導きを祈り求めつつ島の隣人の証に努めたいと願っています。

東京教区諸教会の皆様凡ての人の救いの光である主イエス様の福音の証のお働きに聖霊の導きと祝福をお祈りします。小笠原のためにもお祈り下さい。

小笠原聖ジョージ教会　信徒一同より

《信徒リレーエッセイ》

一歩前へ

大森聖アグネス教会　塩田　告

私は、両親がクリスチャンという環境で、生まれ育ちました。

教会には、幼い頃から、1時間ほどかけて連れて行かれ、SSから礼拝に出席させられていました。子どもの私には、退屈でつまらない時間でしたが、思い出としては強く残っています。

10歳の頃、自宅から自転車で通える大森聖公会（旧称）にひとりで通うようになり、教会ならではの友人を得て、青年期に色々な経験をさせて頂きました。

仕事の関係や思う所があり、息子が生まれた頃から、50歳になるまでの約四半世紀、教会からは離れていましたが、海外では、仕事の合間に、現地の教会を訪ねることがたびたびありました。

戸惑いもなく、すべてを受け止めてくれる場所が、身近にあることに、いつも勇気づけられていたように思います。そして、今はそこから一歩前進をしたいと願っています。

大震災記念聖餐式説教

（要旨）

3月17日聖アンデレ教会

東北教区主教　加藤博道

かつて竹田真主教は「共に生きることは、痛みをともなうことだ」と言われました。

また、ある在日韓国人の神学生からは「共に生きる、というが共になんか生きていないじゃないか」と言われ、続けて「共に生きられない、という現実をきちんと見ていこう」と言われました。

「いっしょに歩こう」という言葉もそうです。いっしょになんか歩けていないという現実が沢山あります。「被災者といっしょに歩む」「日本聖公会としていっしょに歩む」「主と共に歩む」ということが、どのようにして可能なのか問い続けてきた2年間でもありました。

かつて預言者エリヤは女王イザベルに命を狙われ、ホレブ山に逃げ込んだとき、そこで神の声を聞きました。それは強い風や地震や火の中でなく、それらの後に聞こえた「静かにささやく声」でした（それを旧約聖書学者の関根正雄氏は「沈黙の声」と訳しました）。従来、激しい自然現象は神の力のしるし、臨在のしるしとして考えられていましたが、そうではなく、そうしたものが尽きた後に神は「沈黙の声」で語る、それが神の語られ方であったというのです。

被災地において、もっと語られる言葉や活動が必要なのと同じくらいに、死者を含めた沈黙の中に、沈黙の声を聴くことも大切なのではないかと思います。

プロジェクトという言葉のプロというのは、プログレスが進歩、発展、向上を意味するように、前に進むという響きがあります。立てた計画を前に向かって実現、達成していくことです。

今回の大震災の中でも、そういう面は必要でしょう。いつ復興住宅が立つのか、線路が復興するのか、計画がはっきりしないのでは被災地はたまったものではありません。

しかし同時に、前に向って進んで何かを達成するという仕方、考え方ではない部分、この現実の中に「留まる」「佇む」という面もあっていいのでないかと思います。「先に進む」ことは良いことでしょうが、大切なものを「後に残していく」可能性もあります。「佇んで」静かにささやく声、また死者の声を聴き続ける、そのような必要を思い巡らしています。

しかし、山の中で神の臨在に触れたエリヤは、ただ佇んでいただけではありません。そこで「行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒野に向え」という主の声を聴き、新しい使命をもって、困難な現実の中に立ち返っていきます。そして新しい王を立て、エリシャを自分の後継者とします。

最後に「いっしょに歩こう！プロジェクト」の今後についてですが、2年を経て、今の形からは「ギアチェンジ」しようと考えています。全体としては「いっしょに歩こう」パートⅡと言えるでしょう。管区レベルでは新たに「放射能、原発の問題、福島での支援活動」に集中して行こうと。そしてもう一つの面としては、東北教区が「いっしょに歩こう・東北」（私はむしろ「ゆっくり歩こう・東北」と言いたいのですが）として、新地のセンターの活動を中心に、東北教区の出来る仕方でゆっくりと歩いて行こうと、現在そのように考えています。

どうぞ、いまだ多くの嘆きと困難のうちにある多くの人々の上に、主の御力がありますように、ご一緒に祈りを続けたいと思います。

◇　◇

次回　夏号

7月21日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（七）

1. よっぱらい

夫「ういっ、ただいま、今帰ったぞ」

妻「あなた、また飲んできたのね、毎日飲み歩いて、うちはそんなに裕福じゃないんですからね。ほどほどにしてください」

夫「あのなあ、イエスさまだって大酒飲みって言われてたんだぞ」

妻「あらそう、でもイエスさまはいくら飲んでもいいのよ」

夫「どうしてだよ」

妻「だって、水をお酒に変えられるんだから」

2. 本の注文

宅配業者「すみません、本のお届けにまいりました」

牧　師「どれどれ、“上手な説教の仕方”だって、こんな本注文した覚えはないぞ」

宅配業者「はい、ここの教会の信徒一同からの注文です」

3. いびき

信徒1「最近、いびきがひどくて人に迷惑かけるんだよ」

信徒2「君は独身だし、誰にも迷惑かけないじゃないか」

信徒1「いや、説教中、寝るときに迷惑かけるんだよ」